ボランティア体験学習の現状

Current Situation of Voluntary Field Work

丹野真紀子 *，井上修一 **，飛永高秀 ***，久田はづき ***
Makiko TANNO，Shuichi INOE，
Takahide TOBINAGA，Hazuki HISADA

<キーワード>

ボランティア，社会福祉現場実習指導，社会福祉現場実習，社会福祉士

<要　　約>

社会福祉援助技術現場実習指導のカリキュラムの中で行っている，ボランティア体験学習について学生にアンケートを行った。アンケートの内容は，①ボランティア体験学習情報アクセス，②ボランティア体験学習の全体的成果，③ボランティアの具体的内容，④ボランティア受け入れ施設・機関の対応，⑤学生の自己評価についてである。

多くの学生はボランティア体験学習の成果に満足し，まじめに取り組んでいる。ボランティア体験の情報アクセスは，児童，障害者，高齢者それぞれの分野とも①学生が居住する自治体の社会福祉協議会のボランティアセンター，②東京都社会福祉協議会，③施設へ直接問い合わせ，が上位であった。ボランティアの情報を収集する方法は，様々な方法があるが，実際には社会福祉協議会等を媒介として紹介を受ける方法と直接自分がボランティアを行いたい施設へ問い合わせするという方法で行われていた。

ボランティア体験の内容は，①レクリエーションに参加した，②利用者とじっくり話をすることができた，③行事に参加した，が上位である。その他，「直接介護をした」，「ケース記録を読むことができた」という学生もおり，配属実習に近い体験をしていることも明らかになった。これは，学生が社会福祉士養成課程に在籍していることを施設側が意識して受け入れた結果と理解できる。

ボランティア体験学習の成果は，①直接介護やケース記録を読む体験をするなど，配属実習に近い体験をしている。②課題設定をしてボランティアに望んだ学生の満足度が高い。③ボランティア体験が，その後の学びの意識を高め，自己覚地に結びつく。④ボランティア体験学習が，配属実習先決定に役立っている。とまとめることができよう。

* 大妻女子大学　人間関係学部　人間福祉学科　人間福祉学専攻
** 中部学院大学　人間福祉学部　健康福祉学科
*** 中部学院大学　人間福祉学部　健康福祉学科
**** 大妻女子大学　人間関係学部　人間福祉学科　介護福祉学専攻

1．はじめに

大学の社会福祉教育において，社会福祉援助技術現場実習（以下，配属実習）が果たす役割やその意味づけはとても重要である。社会福祉の専門家養成において，机上の理論のみならず，実践との融合は大きな意味を持っている。特に，1986年に「社会福祉士」国家資格が制度化されて以降，実習の重要性が言われている。近年では，厚生労働省が「社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容の改正について（通知）」社援第2667号（平成11年11月11日）において実習教育に関して，「社会福祉援助技術現場実習指導」と「社会福祉援助技術現場実習」との2科目で行うようカリキュラム改革をしたことからも実習教育の取り組みの重要性は伺える。本学科では，当初から実習の事前・事後実習に力を入れ，分野別にグループを分けて教育を行っている。現在でも，9割以上の学生が社会福祉国家資格の指定施設での実習を行っており，よりよい実習教育のあり方を求め検討を続けている。

こうした状況下，2年次の学生が，3年次で行う配属実習前に社会福祉施設をどの様にとらえているのか，大学側が把握しておくことは重要である。その上で，実習事前事後教育をどのように組めば，より効果的な配属実習が可能になるのかなどの検討を試みている。そこで，社会福祉援助技術現場実習指導での課題である体験学習の実態を把握するために，学生に対して調査を行った。

2．本学科の実習教育

本学の実習教育は，2年次の「社会福祉援助技術現場実習指導」，3年次の「社会福祉援助技術現場実習」の2年間で行われている。配属実習を実習期間24日間，実質180時間以上とし，原則として3年次の8～9月の夏期休暇期間中に実施している。配属実習は，学生が各種の社会福祉サービス利用者とそのニーズに対して直接関わりながら，学内で学習した制度・政策論や社会福祉学理論・方法論等を総合的に実践する場となる。とりわけ対人援助や集団援助等を通して，学生一人ひとりの福祉観や人生観・職業観等に影響を与えて，学生の価値観等の変革を迫ることになる。これは，将来のソーシャルワーカーとしての資質を計る貴重な機会となるだけでなく，同時に人間形成の場ともなることを意味している。これらの点を踏まえ，本学の配属実習における達成目標としては，下記の5点を柱として掲げている。①現場体験をふまえ社会福祉専門職（社会福祉士）として仕事をする上で必要な「専門知識」，「専門援助技術」及び「関連知識」の内容の理解を深める。②大学で学んだ「専門知識」，「専門援助技術」及び「関連知識」を実際に活用し，相談援助業務に必要となる資質の向上を目指すとともに，社会福祉士としての専門技術を習得する。③ソーシャルワーカーとしての職業倫理を身につけ，福祉専門職としての自覚にもとづいた行動ができるようにする。④社会福祉実践現場において，具体的な体験や援助行動を専門的援助技術として概念化・理論化しながら体系立てていくことができる能力を涵養する。⑤関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を理解する。以上の目標を達成するために，2年次より「社会福祉援助技術現場実習指導」，3年次より「社会福祉援助技術現場実習」の講義を開講し，配属実習へ向けた学生の様々な不安や戸惑い，あるいは学問上の疑問への適切な対応に努めている。

3．ボランティア体験学習

厚生労働省が「社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容の改正について（通知）」社援第2667号（平成11年11月11日）の「社会福祉援助技術現場実習指導」の授業内容として，「現場体験学習および見学実習」を設定している。本学科では，2年次の前期授業期間中に見学実習を行いまた，夏期休暇中に2箇所（40時間）以上の「体験学習」（以下ボランティア体験学習）を課題としている。ボランティアは，本来自発的に行われるものである。しかし，3年次に行う配属実習での教育効果を高めるためには，

2年次で社会福祉施設の理解を理論的にも実践的にも高める必要があり，学生の意識を高めるため，「体験学習」としてのボランティア体験学習のプログラムを位置づけている。ボランティア体験学習は，前項にあるように「社会福祉援助技術現場実習指導」における事前学習の一つである。このボランティア体験学習は，学生が利用者や指導者と接し，援助者としての視点や自己の適性について考える場の一つとしてとらえ，その体験を踏まえた配属実習につなげるためである。そのため，体験学習前にボランティアノート（手引き）を配布し，学生へ学習内容や目的についての意識付けを行っている。

4．ボランティア体験学習に関する調査の概略

今回は，ボランティア体験学習についての調査を行うにあたり，以下のような目的を掲げた。①学生がアンケートに答えることによって，体験学習のフィードバックをすることができるようになる。②ボランティア先の状況を把握する。③実習指導を担当する教員が，学生がボランティアで得たものを知る。④学生がボランティア体験学習で得たものを知る。⑤学生がボランティア体験で得た成果を次年度の配属実習にどういかしたらよいかを知る。この5つの目的をもとにボランティア体験学習の実態を把握することにした。この調査以外にも，授業における学生の意見や施設からの意見を徴収するなどして把握するようにしているが，このアンケート調査によりより客観的に把握することを試みた。

調査の実施対象は，「社会福祉援助技術現場実習指導」履修者全員（2年生：106名）に対しである。アンケートの内容は，①ボランティア体験学習情報アクセス，②ボランティア体験学習の全体的成果，③ボランティアの具体的内容，④ボランティア受け入れ施設・機関の対応，⑤学生の自己評価についてで，以上のアンケート内容に沿って報告をする。

5．ボランティア体験学習情報アクセス

ボランティア体験学習を2002年7月の時点で，経験しているものが81名（76.4%），うち，調査時点で継続的に行っているものは5名（4.7%），未経験者25名（23.6%）であった。実質的には2年生の時点でボランティアをしていないものがほとんどである。（表1）

表1　ボランティア体験学習以前のボランティア経験の有無

	実人数	%
ボランティア体験学習以前に行ったことがあった	76	71.7
ボランティア体験学習を行う時点で行っていた	5	4.7
全く行ったことがなかった	25	23.6
合　　計	106	100.0

ボランティア体験を始めるときの情報源，つまり，ボランティア先の開拓の方法と手段であるが，図1に示すとおりである。情報源としては，①学生が居住する自治体の社会福祉協議会のボランティアセンター77名（72.6%），②友人に相談52名（49.1%），③東京都社会福祉協議会41名（38.7%），④インターネット39名（36.8%），⑤地域の回覧板34名（32.1%）であった。

しかし，実際にボランティアを行った施設を決定した時の開拓経路は，児童，障害者，高齢者それぞれの分野とも①学生が居住する自治体の社会福祉協議会のボランティアセンター，②東京都社会福祉協議会，③施設へ直接問い合わせであった。ボランティアの情報を収集する方法は，様々な方法があるが，実際には社会福祉協議会等を媒介として紹介を受ける方法と直接自分がボランティアを行いたい施設へ問い合わせするという方法で行われていた。（表2）

図1　ボランティア先を決定するためにどのような情報源を求めたか（複数回答）

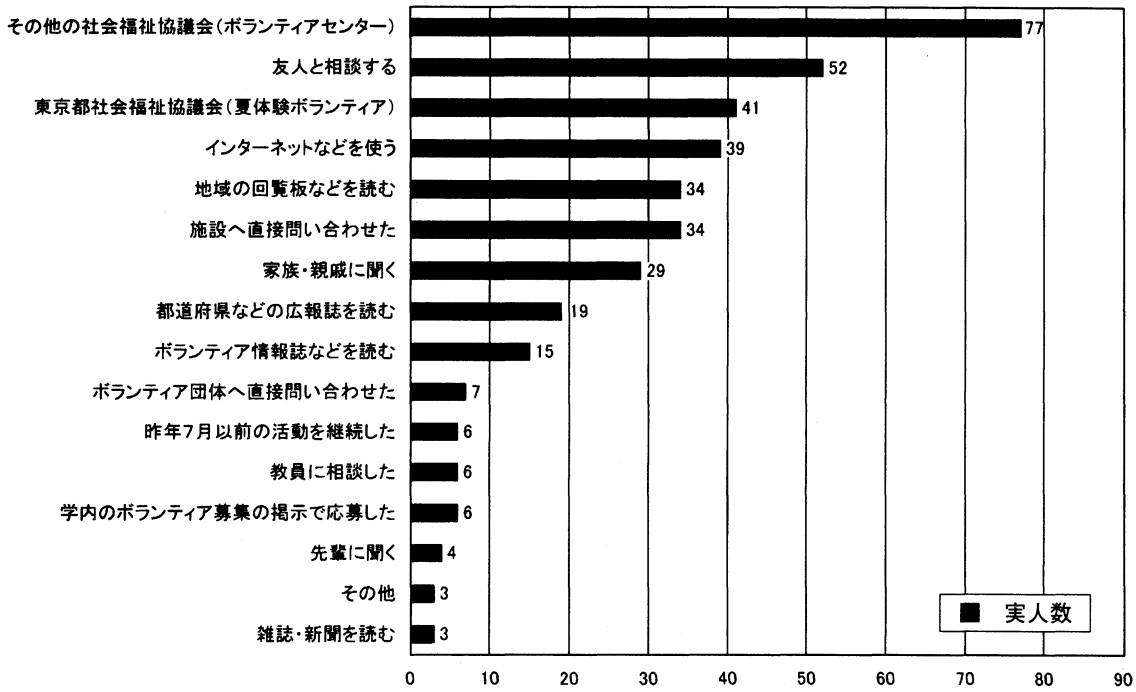


表2　ボランティア先決定時の開拓経路

	実人数	%
インターネットなどを使う	9	4.2
家族・親戚などに聞く	11	5.2
先輩に聞く	4	1.9
東京都社会福祉協議会(夏体験ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ)	47	22.2
その他の社会福祉協議会(ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｾﾝﾀｰ)	70	33.0
ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ団体へ直接問い合わせた	2	0.9
施設へ直接問い合わせた	20	9.4
学内のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ募集の掲示で応募した	4	1.9
教員に相談した	4	1.9
昨年7月以前の活動を継続した	7	3.3
その他	10	4.7
複数記入	23	10.8
ＮＡ	1	0.5
合　　計	212	100.0

ボランティア活動先を決定する際，困ったことがあったかとの設問に対して，17名の学生（16%）が「困ったことがあった」とした。（表３）その問題点としては，①「施設側との日程調整が困難」７名，②「行きたくても交通の便が悪い」４名，③「ボランティア先の分野を迷う」２名，以下，「ボランティアを紹介してもらう際に紹介料を徴収された」，「施設への問い合わせ方法が分からない」，「短期間のボランティアということで断られた」，「居住地でボランティア先を探すこと自体が困難」がそれぞれ１名となった。

６．ボランティア体験学習の全体的成果

ボランティア体験について，「満足している」と答えた者は94名（88.7%），「満足していない」と答えた者は7名（6.6%）であった。（表４）

表３　ボランティア体験先を決定する際、困ったことはあったか

	実人数	%
困ったことはなかった	89	84.0
困った	17	16.0
合　　計	106	100.0

表４　ボランティア体験学習は満足できる内容だったか

	実人数	%
満足している	94	88.7
満足していない	7	6.6
どちらとも言えない	5	4.7
合　　計	106	100.0

ボランティア体験学習が満足できた理由としては，「ものの見方，考え方が広がった」74名（69.8%），「利用者や子どもたちの理解に役立った」68名（64.2%），「職員やスタッフの役割理解に役立った」65名（61.3%）の順であった。ここから，専門的な知識の深まりとともに，利用者理解や職員の業務，役割についての理解の深まりが見て取れる。（図２）この結果は，伊部が行った調査による「学生が抱いている不安」ともリンクしている（伊部1998：301-314）。伊部の調査では，実習前の学生の不安として，実習先の不安，特に職員や利用者との関りについての不安が大きいことが報告されている（伊部1998：301-314）。調査結果から，ボランティア体験学習が，学生の不安解消と同時に利用者理解・職員理解を深めていると理解できる。

ボランティア体験学習が満足できなかった理由としては，「思うとおりの活動ができなかった」６名（5.7%），「人間関係がうまくいかなかった」２名（1.9%）であった。（表５）

ボランティア体験の全体的な成果は，大変勉強になったが48名（45.3%），勉強になったが57名（53.8%）と99.1%の学生が何らかの成果を得たと実感している。（表６）

ボランティア体験学習で勉強になったこととしては，「現場のことがよくわかった」77名（72.6%），「利用者の考えや生活，ニーズを知ることができた」63名（59.4%），「専門職員の意見を聞くことができた」63名（59.4%），「利用者の援助に関ることができた」57名（53.8%）となっている。（表7）特徴的なのは，「利用者の援助に関ることができた」と回答している学生が57名（53.8%）とポイントが高かったことである。「直接介護」体験者が４割近くいたことを裏付ける結

図2　ボランティア体験学習が満足できた理由

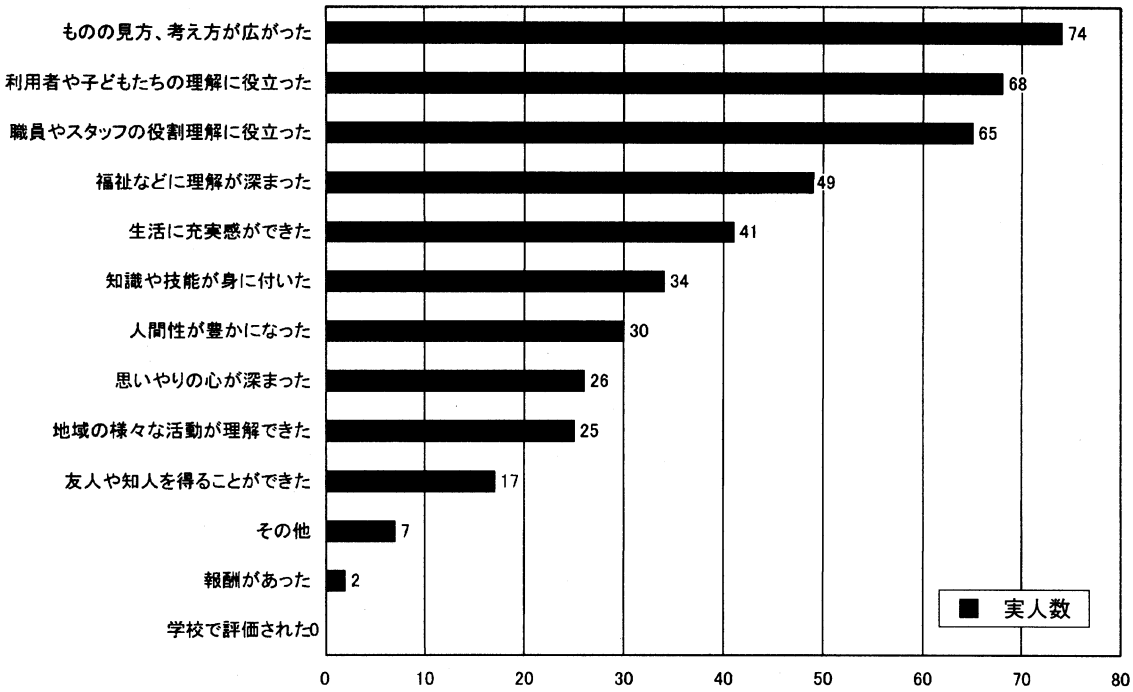


表5　ボランティア体験学習が満足できなかった理由（複数回答）

	実人数	%
活動がおもしろくない	1	0.9
交通費等がかかり過ぎた	1	0.9
報酬がない	0	0.0
人間関係がうまくいかなかった	2	1.9
自分の時間が少なくなった	1	0.9
責任を取らされる	0	0.0
学校での評価がなかった	0	0.0
思うとおりの活動ができなかった	6	5.7
継続的に活動ができなかった	0	0.0
その他	3	2.8
合　　計	N=14	

表6　ボランティア体験の全体的な成果について

	実人数	%
大変勉強になった	48	45.3
勉強になった	57	53.8
あまり勉強にならなかった	1	0.9
ほとんど勉強にならなかった	0	0.0
合　　計	106	100.0

果となった。

7．ボランティアの具体的内容

ボランティア体験日数としては，4日以上が105名（99.1%）で，3日が1名（0.9%）であった。（表8）ボランティア体験時間数は，50時間以上が61名（57.5%），40時間以上45時間未満が31名（29.2%）という結果であった。（表9）

体験内容としては，「レクリエーションに参加した」82名（77.4%），「利用者とじっくり話をすることができた」78名（73.6%），「行事に参加した」61名（57.5%）の順である。（図3）その一方で，「直接介護をした」42名（39.6%），「ケース記録を読むことができた」9名（8.5%）という学生もおり，実習に近い体験をしていることも明らかになった。

この結果は，学生が社会福祉士養成課程に在籍していることを施設側が意識して受け入れた結果と理解できる。その理由として，施設側が，学生を「後継者養成として受け入れてくれた」29名（27.4%）という学生自身の主観的な印象から読み取ることができる。（表10）ボランティア先の

表7　ボランティア体験でどのようなことが勉強になったか（複数回答）

	実人数	%
現場のことがよく分かった	77	72.6
専門職員の意見を聞くことができた	63	59.4
利用者の援助に関わることができた	57	53.8
利用者の考えや生活、ニーズを知ることができた	63	59.4
自己覚知に役立った	43	40.6
その他	5	4.7
合　　計	N=308	

表8　ボランティア体験日数

	実人数	%
1日	0	0.0
2日	0	0.0
3日	1	0.9
4日以上	105	99.1
合　　計	106	100.0

表9　ボランティア体験時間数

	実人数	%
40時間	5	4.7
40時間1分以上45時間未満	31	29.2
45時間以上50時間未満	9	8.5
50時間以上	61	57.5
合　　計	106	100.0

図3　ボランティア体験でどのようなことを体験したか（複数回答）

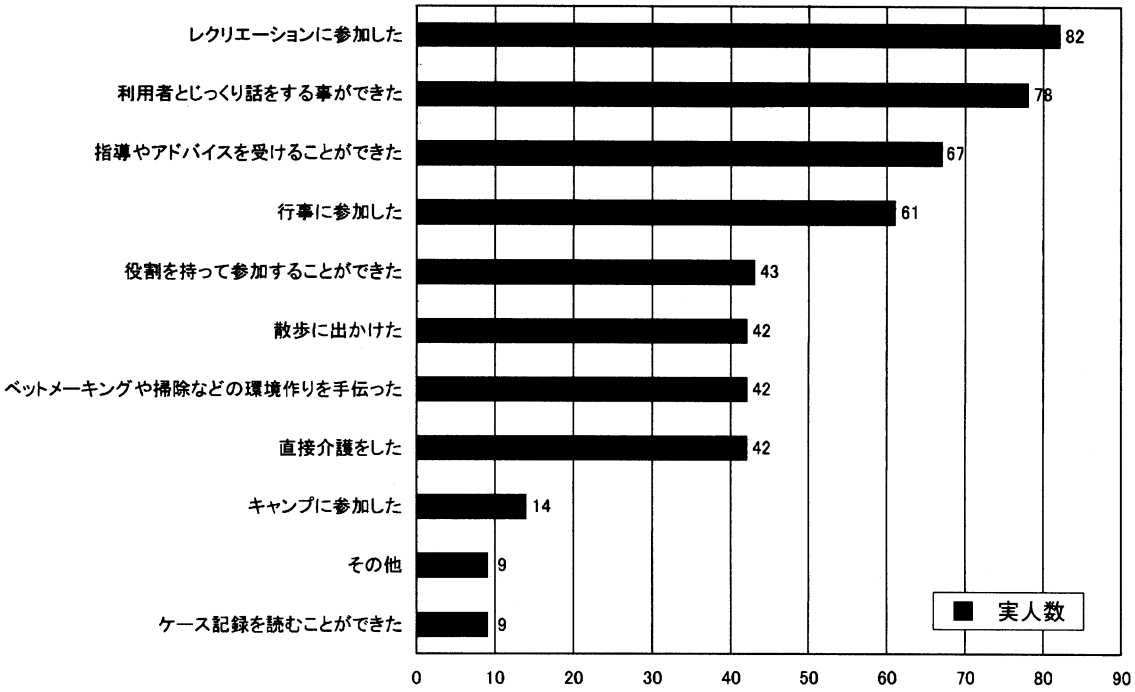


表10　ボランティア先では、ボランティアをどのような意識で受け入れていたように思うか

	実人数	%
後継者養成として受け入れていたように思う	52	24.5
地域交流を意識して受け入れていたように思う	82	38.7
労働力を当てにして受け入れていたように思う	30	14.2
特にこれといった考えはなかったようだ	19	9.0
その他	15	7.1
NA	14	6.6
合　　計	212	100.0

開拓は学生自身によるが，その受け入れにあたっては，大学からの依頼文を携え，ボランティア体験学習の趣旨を施設側に伝えるようにした。

8．ボランティア受け入れ施設・機関の対応

ボランティア体験をした施設・機関の受け入れ体制についてであるが，施設分野別のボランティアプログラムの有無については図4に示すとおりである。各分野の施設数は高齢分野施設等78施設，障害分野施設等91施設，児童分野施設等37施設，その他3施設であり，総数212施設である。(表11)

「ボランティア等に対してのプログラムがある」とした割合は，高齢分野48.7%，障害分野60.2%，児童分野45.9%となっている。(図5) また，プログラムについては，69.9%の学生が，何らかのプログラムがあるほうが良いとしている。(表12)

図4　ボランティア体験のためのプログラムが用意されていたか

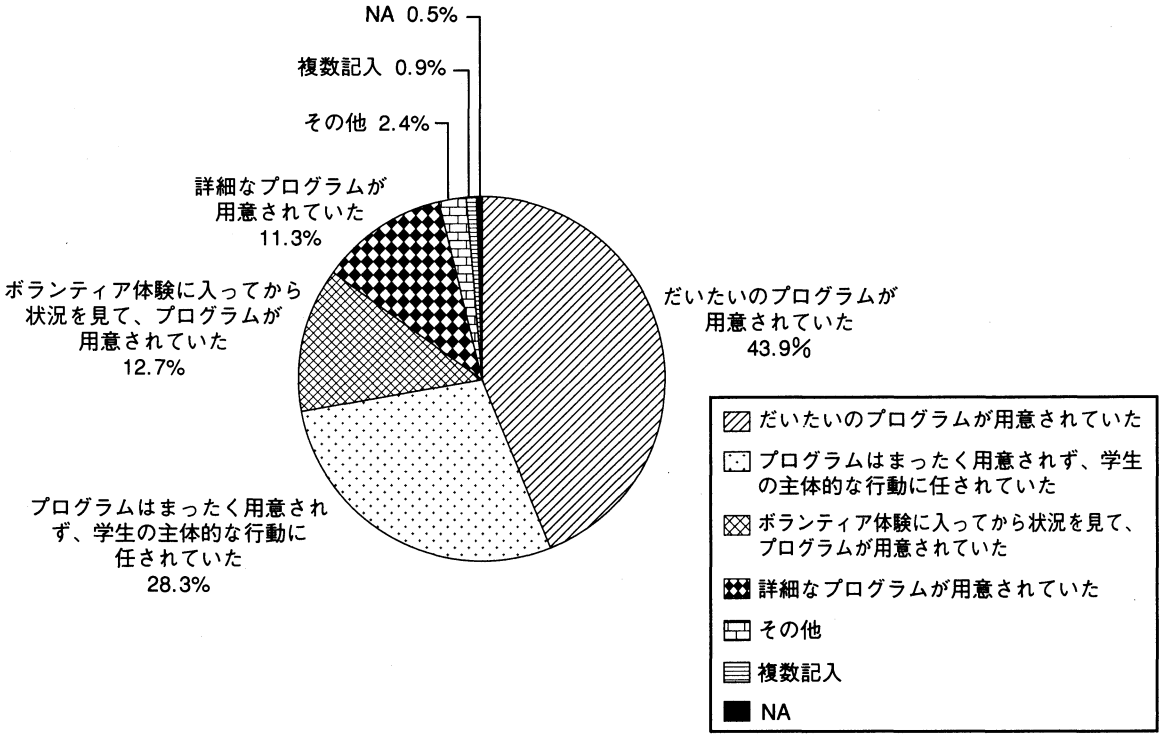


表11　体験分野

	実人数	%
高齢者	78	36.8
障害児者	91	42.9
児童	37	17.5
その他	3	1.4
複数記入	1	0.5
ＮＡ	2	0.9
合　　計	212	100.0

今回のボランティア体験の施設・機関が社会福祉士実習に規定される施設以外も含まれているということも考慮しなければならないが，大学側の配属実習における施設選択に大いに参考になると思われる。ボランティア体験を配属実習への一つのステップとして位置づけるならば，施設側の実習指導体制の把握とともに学生の実習効果の相互関係についても専門職養成機関である大学が客観的に評価し，施設側に改善を要求していくことも検討していくことが必要となることとなろう。

9．学生の自己評価について

ボランティア体験学習にあたって，自ら課題を設定して望んだ学生は90名（84.9%），設定しな

かった学生は，16名（15.1%）であった。(表13)
課題設定と満足度の相関では，課題設定してボランティアに望んだ学生の満足度が高く，課題設定せずにボランティアに望んだ学生の満足度が低いことが明らかになった。

利用者とのコミュニケーションや関係づくりにおいては，「大変うまくできた」47名（22.2%）と「うまくできた」108名（50.9%）の計155名

図5　施設分野別のボランティアプログラムの有無

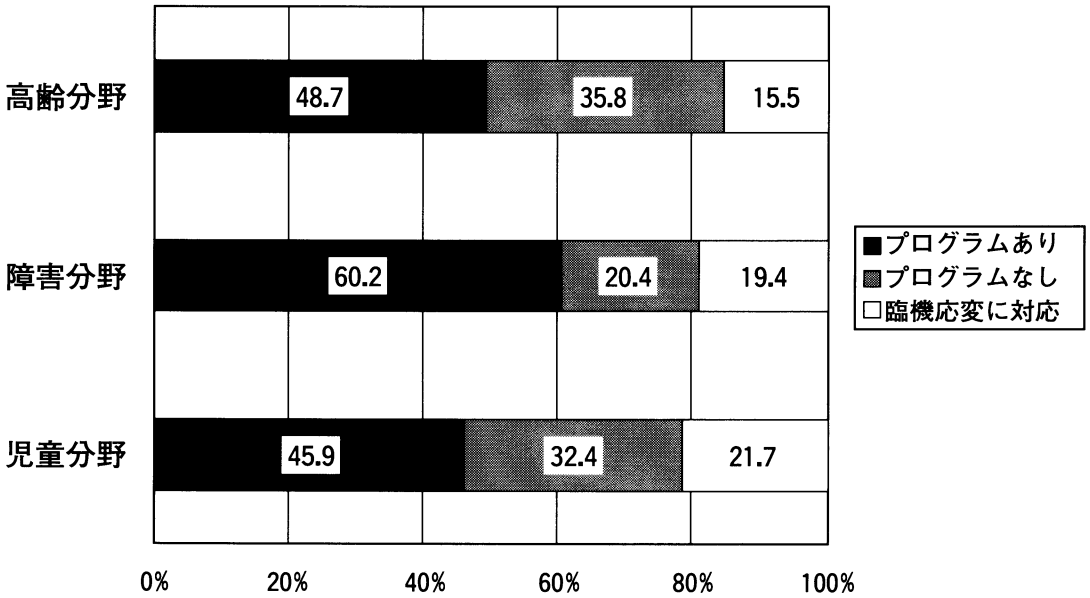


表12　ボランティア体験おいて、詳細なプログラムがあった方がよいか

	実人数	%
是非あった方がよい	30	14.2
どちらかと言えばあった方が良い	118	55.7
どちらとも言えない	56	26.4
どちらかと言えば無いほうが良い	4	1.9
無い方が良い	4	1.9
合　　計	212	100.0

表13　ボランティア活動における自己課題の設定

	実人数	%
設定した	90	84.9
設定しなかった	16	15.1
合　　計	106	100.0

（73.1％）が，概ね良好な関係構築ができたことを示している。その一方で，「あまりうまくできなかった」17名（8.0％），「全然うまくできなかった」1名（0.5％）と計18名（8.5％）の学生が，利用者とのコミュニケーションや関係構築について課題を残す結果となった。（表14）

同様に職員との関係においても，「大変うまくできた」50名（23.6％）と「うまくできた」119名（56.1％）の計169名（79.7％）の学生が良好な関係を築くことができた一方，「あまりうまくできなかった」学生が5名（2.4％）いた。（表15）

この結果は，ボランティア先で「自分が歓迎されていない」という印象として顕在化し，その理由としては，「職員が忙しそう」「余裕がなさそう」との記述が見られた。（表16）

ボランティア体験後の福祉を学ぶ姿勢の変化については，「非常に意欲は高まった」46名（43.4％），「どちらかといえば高まった」46名

表14　利用者とのコミュニケーションや関係作りができたか

	実人数	%
大変うまくできた	47	22.2
うまくできた	108	50.9
どちらとも言えない	39	18.4
あまりうまくできなかった	17	8.0
全然うまくできなかった	1	0.5
合　　計	212	100.0

表15　指導職員（複数いる時は主な人）との関係はうまくいったか

	実人数	%
大変うまくできた	50	23.6
うまくできた	119	56.1
どちらとも言えない	31	14.6
あまりうまくできなかった	5	2.4
全然うまくいかなかった	0	0.0
指導者が誰なのかよくわからなかった	6	2.8
ＮＡ	1	0.5
合　　計	212	100.0

表16　ボランティア先であなた（学生）はどのように受け入れられていたか

	実人数	%
こころよく受け入れてくれた	1	0.5
どちらかと言えばこころよく受け入れてくれた	146	68.9
どちらとも言えない	50	23.6
あまり歓迎されなかった	11	5.2
全く歓迎されなかった	4	1.9
合　　計	212	100.0

(43.4%) と，計92名 (86.8%) の学生が学習意欲の高まりを感じている。(表17)

配属実習先を決定するにあたってボランティア体験が役に立ったかについては，「役に立ったと思う」が99名 (93.4%)，「役に立たなかったと思う」が3名 (2.8%) という結果であった。(図6)

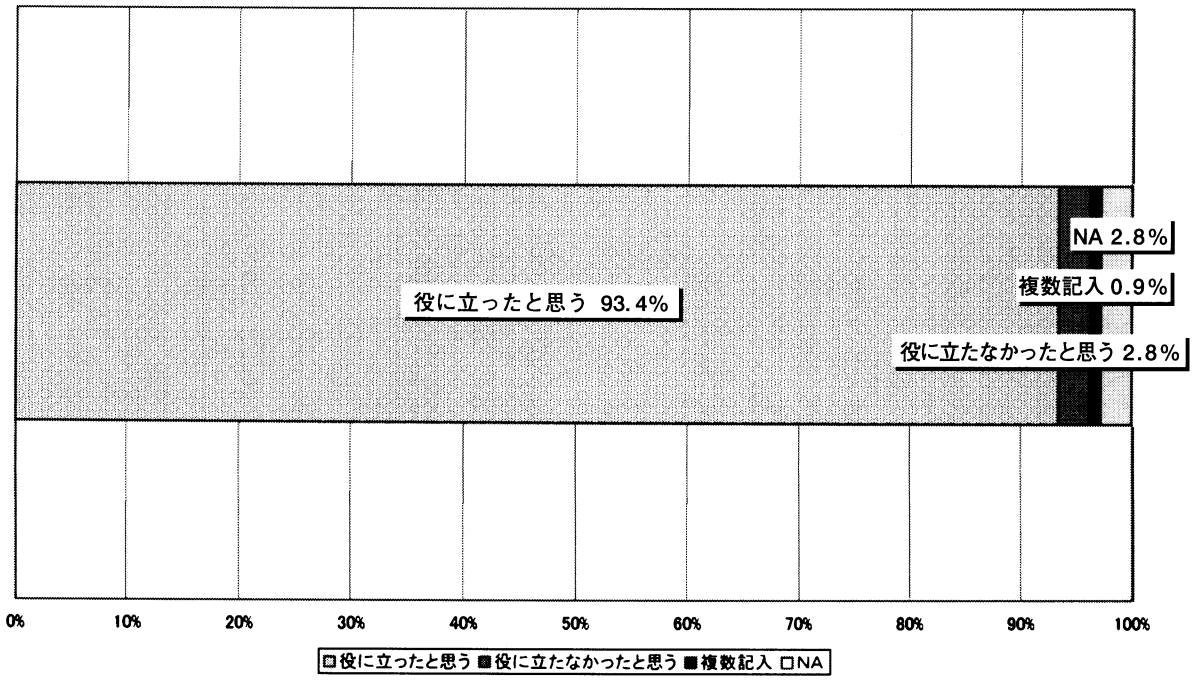
これらのことから言えることとしては，ボランティア体験が福祉を学ぶ意欲を高めるとともに，配属実習先決定に結びついているということである。ボランティア体験後のふりかえりにおいて，自由記述で書かせてみると，約4割の学生が知識や技術の不足を痛感していることが明らかになった。

その後，ボランティアを継続的に続けているか

表17　ボランティア体験を終え、福祉を学ぶ姿勢はどのように変化したか

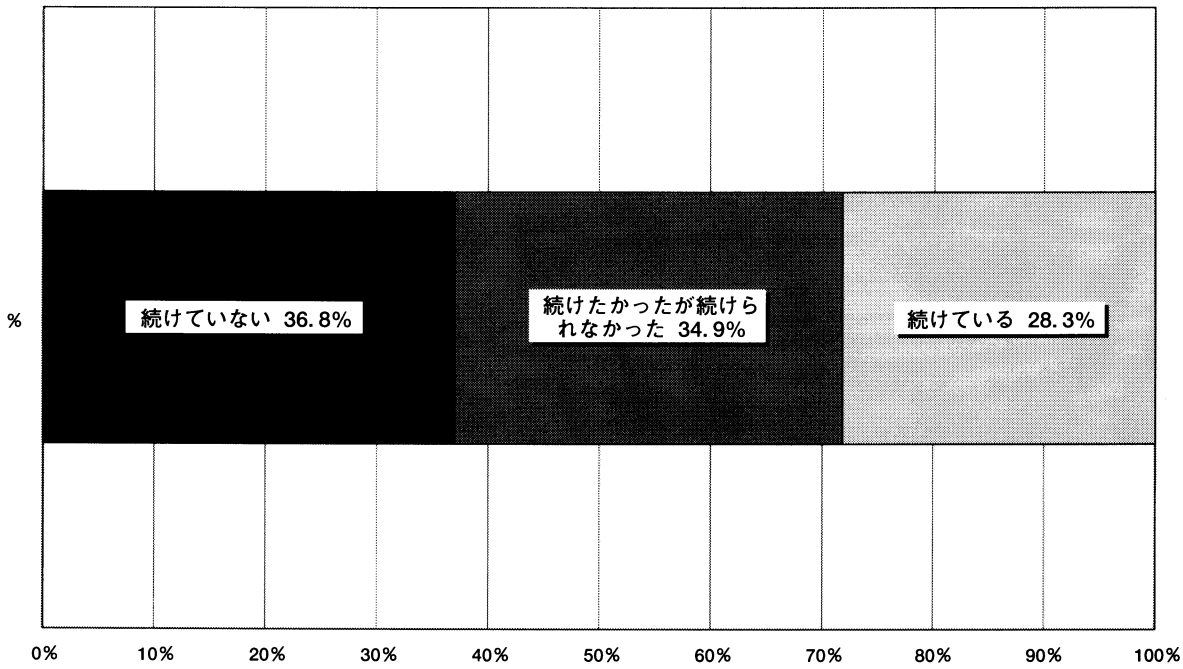
	実人数	%
非常に意欲は高まった	46	43.4
どちらかと言えば高まった	46	43.4
ボランティア前と変わらない	8	7.5
どちらかと言えば意欲は低くなった	5	4.7
ボランティア前より意欲は低くなった	1	0.9
合　　計	106	100.0

図6　配属実習先を決定するにあたって，ボランティア体験が役に立ったか



については，30名が続けている。（図７）前期の時点で，５名だったことを考えると，学生の良い動機付けにつながっていると思われる。逆に，続けられなかった学生にその理由を問うと，「続けていない」「続けたかったが続けられなかった学生」76名中64名（84.2％）が「大学での時間が忙しい」と答えている。（図８）資格取得を望む学生にとって，カリキュラムが過密になることは仕方がないことではあるが，ゆとりを持ったカリキュラム作りを検討しなければならない記述でもある。

図７　現在もボランティアを続けているか



10.ボランティア体験学習の課題

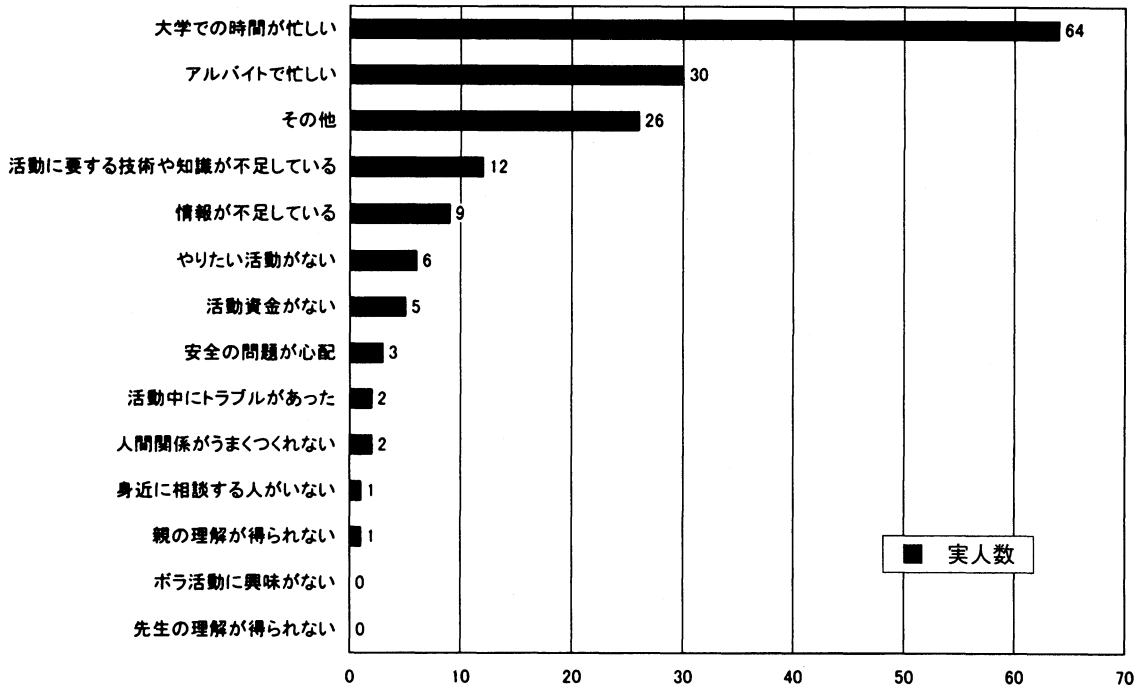
今回の調査結果を踏まえ，以下の２点に絞り考察をしたい。

（１）ボランティア体験への情報アクセスと受け入れ施設の体制について

ボランティア活動先を決定する際，困ったことについて17名の学生が「困ったことがあった」とした。その問題点としては，①「施設側との日程調整が困難」７名，②「行きたくても交通の便が悪い」４名，③「ボランティア先の分野を迷う」２名，以下，「ボランティアを紹介してもらう際に紹介料を徴収された」，「施設への問い合わせ方法が分からない」，「短期間のボランティアということで断られた」，「居住地でボランティア先を探すこと自体が困難」がそれぞれ１名となった。ここでの問題点は大きく福祉学生側，施設側，そしてボランティア仲介側の３点で捉えることができよう。

福祉学生側の問題では，「施設側との日程調整が困難」がもっとも多かった。施設と福祉学生との相互の都合が合わないということで致し方ない点もあるかもしれない。しかし，実習指導の講義の一環として課された課題を達成するという意味からも施設側に対しての福祉学生側の配慮（施設の指定する日程に合わせることなど）も必要とな

図8　現在ボランティアを続けられない理由



るかと思われる。

また，ボランティアを行う福祉学生自身の問題意識や目的意識が定まっていないための問題もあろう。これは学生自身の生活経験が不足していることにも原因があると思われる。そのため，現場実習と学生の生活とを結びつけることができるような事前学習の内容と指導方法を検討することが望まれる。さらには社会福祉現場実習指導などの一方的な集団的講義においては，学生自身の生活実態や福祉観などについては把握しづらい。そのため，個別指導を中心としたマンツーマン指導により学生の実習に対しての問題意識や関心を掘り起こすことも必要となろう。

次に施設側の問題としては「交通の便が悪い」という施設立地の問題がある。ボランティアに限らず社会福祉士実習においても全ての福祉学生が自家用車やバイクなどを所有し，施設までのアクセスを確保できるとは限らない。たとえ，自家用車やバイクなどの交通手段を確保したとしても，それには危険性を孕んでいる。そのためにも，施設と大学，実習生の3者間で，安全性についても検討していく必要があろう。

最後にボランティア仲介側の問題として，A社会福祉協議会ボランティアセンターにおける紹介の有料化がある。近年のボランティアの加熱状況によってボランティア希望者が増加しているという現状は，福祉に対する社会の関心の高さを示すことで歓迎するべきことであろう。しかし，ボランティア先を探す段階で紹介料を払わなければならないということは，福祉学生に限らず一般市民のボランティア参加の動機を損ねることにもなりかねない。

これらの問題についても学生を送り出す大学側が責任を持ち，学生指導においても配慮していくことが必要となるであろう。

（2）ボランティア体験学習と配属実習との関係

ボランティア体験の内容は，利用者，職員と関

わることができたという記述が多く，これにより，施設の役割，地域との関わり方，施設のあり方やその違いも理解できたと思われる。それが。学生自身が自分の興味のある分野や，学問について明確になったと語る一因であったといえるのではないだろうか。

体験学習前指導では，なるべく違う分野の施設を体験するように指導している。多くの学生は意識的に老人，障害，児童の３分野の施設に出かけるようにしており，そのことが結果的に「自分の視野が広がった」「自分自身を高めることができた」「新しい自分を発見した」と言う記述につながっていると思われる。偏った見方や，自分自身を自分で規定してしまわないように自己覚知することは援助者としてとても重要で，社会福祉援助技術演習での課題にもなりえるものである。

本学科の１，２年次のカリキュラムをみると，１年次は一般教養中心，２年次に社会福祉専門科目中心となっており，２年次の学生は，１年次との違いと２年次になり急激に増える福祉知識に対して，さまざまな感情を抱くようである。ボランティア体験学習で出会う人は，利用者のみならず，同年代のボランティアの人もいる。社会福祉を学んでいる人だけではなく，経済や教育など，福祉とは違う分野を専攻とする学生とも出会う。そうした中で，ちょっとした違和感や，共感，社会福祉をなぜ選んだのか，学んでいることが何かなど，自分に問いかける機会も増え，ちょっとした自己覚知の機会を呼び起こしているようである。

こうしてボランティア体験学習でさまざまな利用者に触れ，多くの人と出会うことにより，自分自身と向き合う機会を体験できたことは，３年次以降の社会福祉学習にとってはとても意味あるものであると認識できる。

以上より，ボランティア体験学習は①ボランティア体験学習において，直接介護やケース記録を読む体験をするなど，実習に近い体験をしている。②課題設定してボランティアに望んだ学生の満足度が高い。③ボランティア体験が，その後の学びの意識を高め，自己覚地に結びつく。④ボランティア体験学習が，配属実習先決定に役立っている。とまとめることができよう。

しかし，学生の中には，「ボランティアは強制されてやるものではない」と記述したものもいる。また，学生によっては，「強制されないとできないから課題として出してほしい」と望む者も多かった。「ボランティア」の本来の性質を考えると実習担当教員として悩むところである。現在の社会福祉士実習担当教員および社会福祉士実習体制においては，２年次で１学生に対し３施設の１日ないしは２日の体験実習を100余の学生に対して準備することは難しい。配属実習でさえ，実習先不足に悩んでおり，今後の課題であろう。

11．終わりに

ボランティア体験学習において，多くの学生が「勉強になった」と考えており，まじめに取り組んでいることは，ボランティア体験記録を見れば十分汲み取れる。「もっと勉強しなくてはいけないという気になった」「将来どうするかきちんと考えられるようになった」「自分自身についていろいろ考えさせられた」「座学ではない実践を知ることで，感じること，知識として学ぶことが多かった」「自分の適性を考えるようになった」など社会福祉を学ぶ意欲，配属実習に対する期待が高まる学生が多い。２年次に設定した体験学習がカリキュラム上でも大きな役割を持っていることは理解できた。

しかし，「ボランティア」を課題で行うことについては検討の余地があろう。また，学生によっては，満足な成果を得られなかった人もおり，すべての学生が成果を挙げられるような体験学習をどう組むかが重要である。しかし，現実的には困難であることも事実である。

今後，ここで得た学習意欲をどう３年次の配属実習に結びつけるのか，事前学習の重要性を痛感したアンケート結果でもあった。社会福祉を学ぶ学生にとって２年次という早い時期に少しでも現場体験ができるよう，さまざまな工夫は必要である。この体験学習を終え学生は成長してキャンパスに戻ってくる。これが，配属実習につながり，更なる体験を積み，社会福祉士としての将来が続

くよう期待している。

【参考文献】

伊部恭子（1998）「大学における社会福祉援助技術現場実習教育に関する研究」『東洋大学大学院紀要第』第35集，301-314.

（財）内外学生センター（1997）『「学生のボランティア活動に関する調査」現状と課題』

丹野真紀子・牧野田恵美子（1997）「学生の社会福祉現場実習における成果と福祉現場に対する意識について」『日本女子大学紀要人間社会学部』第7号　日本女子大学

牧野田恵美子・小山聡子・須之内玲子・中谷陽明（2002）「社会福祉現場実習の現状」『社会福祉』第42号　日本女子大学